

〈史料紹介〉黒川古文化研究所蔵『竊奸秘伝書』

山田 雄 司

【解題】

黒川古文化研究所蔵『竊奸秘伝書』は、二四・一×一七・二センチメートル、全二二丁で、楮紙に記されている。

『竊奸秘伝書』と題名が付けられている書は、黒川古文化研究所のほかは、京都大学附属図書館富士川文庫および伊賀流忍者博物館（以下、忍博本）に所蔵されていることが確認できる。このうち、前者は全く内容が異なる。後者は、冒頭部分から「高田郷左エ門等演説ス」の部分までは同一であるが、その後は術名の列記となり、末尾の「是此一卷者」から系図までは再び同一となる。そして黒川古文化研究所蔵本は、玉川大貳奥乗から宮下喜水周茂に伝えられたとされるのに対し、忍博本は玉川大貳奥乗から長谷川善兵衛に伝えられたことが記されていることから、この時点で分かれたと考えられる。

系図の最初に記される香坂（高坂）弾正昌信は武田晴信（信玄）・勝頼に仕え、武田四天王の一人とされる人物である。また、小幡景憲は武田氏の家臣小幡昌盛の子で、徳川氏に仕えた甲州流軍学者として名高い。小幡昌盛から原正盛に伝えられたとするが、原正盛は松代真田家家老である。さらに、禰津数馬直延、望月治部左衛門行廣といった人物は十八世紀後半の真田家文書に名前が見られ、松代藩家老となっていることから、この『竊奸秘伝書』は甲斐武田家から真田家に伝えられていた伝書と位置づけることができる。長谷川善兵衛時芳は御番仕、小林市治昌封は御近習、竹内金左衛門貞一は給人格御勘定役だったことが、

『文政七年真田家中出仕由緒書』（『松代』二三号、二〇〇九年）からわかる。最後に伝授されたのは、宮下重吉郎治政という人物だが、この人物については不明である。また、裏表紙には江森徳幸とあり、最後に本書を所持していた人物だと思われるが、この人物についても不明である。

冒頭「伊賀流甲賀流竊奸秘伝書」とあり、伊賀・甲賀の者が記した書籍があり、これを多田治部左エ門と高田郷左エ門が演説したものが本書だという。武田信玄は忍びを左右の手のように自在に使ったことによりすべての戦いに勝利することができ、家臣の馬場美濃守、山縣三郎兵衛、山本勘介が内談して、横田備中守、原隼人、多田治部左エ門、高田郷左エ門の四人を出抜（デヌケ・スッパ）の物頭として支配させたという。内容は、さまざまな忍術について具体的に記され、既知の忍術書にはみられない内容も多い。

伊賀上野観光協会編『忍秘展』（伊賀上野観光協会、二〇〇七年）には忍博本の解題が付されているので参照いただけたら幸いである。

なお、本書翻刻にあたり、黒川古文化研究所理事長木村陽一氏ならびに同研究所研究員川見典久氏に大変便宜を図っていただいた。また、翻字の確認を高尾善希三重大学人文学部准教授にお願いした。記して感謝申し上げる。

【凡例】

字体は、新字体を用い、常用漢字を使ったが、人名はそのままとした。異体字・略字は常用漢字に直した。読みやすくするために、読点を適宜施した。解説できなかった文字は□で表した。注記は右傍に（）で付した。

【翻刻】
（実紙ウハ書）

竊奸秘伝書

伊賀流

竊奸秘伝書

甲賀流

夫大将者竊奸仕事為不知不叶故、武田信玄公忍仕玉フ事、左右ノ如御手、其故御一代戦全御勝利也、然間御家臣馬場美濃守、山縣三郎兵衛、山本勘介御内談有之、
信玄公御家之出拔物頭横田備中守、原隼人、多田治部左エ門、高田郷左エ門、被仰付候、
一、日本六十余州忍法一致而無二当家之不同不可用、

多田治部左エ門

秘伝書

高田郷左エ門

山本勘介曰、大将者竊奸ヲ仕フ之道為不知不叶、其故ハ他国ノ地理、城内ノ堅固不堅固、攻口相守候大将之家名相印紋所其外常ノ行跡、弓矢之功不功、惣頭トモ様子之事、尤大将ハ不及申、是等之義委敷可知義ハ、竊奸ヲ入テ聞届事專一也、其外敵ノ虚実或ハ計策之義、敵地、異説ヲ触レ内輪ヲ取崩シ、百姓ヲ引付、惣而出拔之業限り不可有故ニ、大将之下ニナクテ不叶者也、然則出拔之意味不知、則此者召仕事

危シ、殊更出拔六十余州之出拔弘志一致ニテ万端ニ通シ、互ニ知セ合ト言リ仕之事大事ナリ、第一、恩ヲ以テ仕フ、第二、法ヲ以テ仕フ、第三、功ヲ以テ仕フ、第四、添人ヲ以テ仕フ、第五、此道ヲ以テ仕フ、五ヶ条口伝アリ、依之、
信玄公御家之出拔物頭多田治部左エ門功者タルニ依テ、口伝之品々相記シ、子孫ニ伝フル也、元来此道伊賀甲賀之者ヨリ記セル其書籍有之者、右治部左エ門、高田郷左エ門等演説ス、

一、功之入りタル軍者ハ、唯人ヲモ竊ニ仕フト云リ、是不成トキハ添人ヲ以テ用ル、口伝、一、奸者ニ仕フ者、第一、其智有人、第二、口ノヨキ者、第三、覚ヘヨキ者、第四、無病ナル者、第五、気情強キ者、第六、早道ナル者、第七、物書モノ、七ヶ条無之モノハナラズ、右之外、猿牽、サ、ラスリ、尺八フキ、占師、執行坊主、
依リヨル所非人、此七人トキニヨリ申付、金子添人アリ、口伝、

一、敵之備之次第、手配、相言葉、敵之大、敵分、物頭之面、敵之諸法度、旗之紋、山川筋、嶮岨、家居之様子、貧福ノ外、絵図覚書之事、
一、竊者心付ケ之事、主人之姓名、
主人ノ紋、惣テ印有之モノ持ベカラズ、

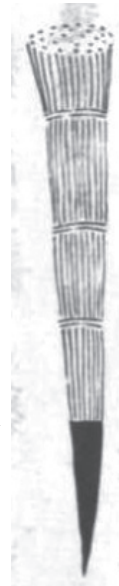
一、他国ヘ行竊者、人ニ物問フ事、先百姓之家ニ行ハズ、語ラズ、種々申出シ、口ブリ引出シ問ナリ、筋タシカ成時ハ、大事ヲ問フ事ハ、恩ヲ与、
申義、虚実語抛ヲ糺シ可宛行、口伝、

一、出拔ハ、諸国郷談ヲ仕イ覚ル事、一、出拔ハ火ヲ持事肝要ナリ、杉原之黒焼フノリニテカタメ、エタニハサミモツナリ、

一、食物ハホシ飯持ヘシ、又一方米ヲ水ニホトバシ、麻木綿トニ包ミ、土ヲクボメ下ニワラナリトモ木ノ葉ナリトモ敷中ニ置キ、上ニツチヲ薄クヲキ、其上ニテ火ヲタケバ飯ニ成ルナリ、一、桶ナリトモ捲タル物ナリトモ、水ヲ入レ石ヲヨク洗ヒ置、ナルホド焼候テ入レ、フタルシテイサ、カ置ハ汁ニナルナリ、一、水ヲ尋ル事、嶮岨ノ下ニ水

アリ、柳生ル所水アリ、鴨鷺ノ近ヅク所水アリ、一、出抜ハカイツケ持事、犬ホユル時用ルナリ、

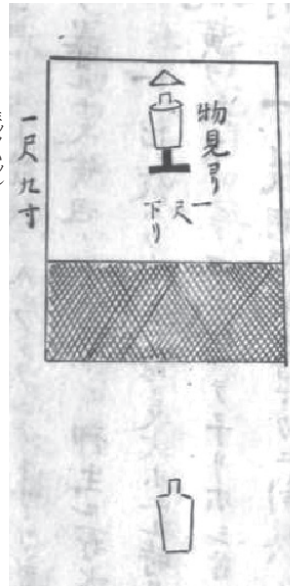
一、手火矢桜ノアツ皮、硫黄ヲ細末ニシテセウ酎^(焼)ニテネリホシ付ケ、コマカニシテ釘ヲ付持、口伝、一、投明松竹ヲコマカニ割、松ノ木ト雜五寸釘ヲ結ヒソエ、重リヲ付ル、口伝、



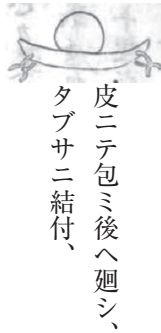
一、風雨明松、明礬^{五匁}、鼠糞^{一匁}、松脂^{五匁}、艾葉^{一匁}、生腦^{五匁}、焰硝^{五匁}、麻灰^{一匁}、丹礬^{五匁}、

右細末ニシテ竹ノ筒ニコメル、口葉アリ、口伝、但老人忍入ニハヲトアリ、遠慮スベシ、口伝、

一、鋪明松 丹礬^{八匁}、生腦^{五匁}、松脂^{七匁}、硫黄^{三匁}、焰硝^{五匁}、



一、生捕者 密々^{ミツクツレ}連



右何も口伝、

一、手内之明松 杉板ヲ薄クヘキ四寸ホドニシテ硫黄ヌリ持ナリ、用ル所口伝、

一、風吹紙燭 焰硝、硫黄等分、米^{三分}、

右風吹トキ妙ナリ、口伝、

一、芦明松 木綿ノ切ニ松ヤニヌリアシヲ卷用ル、口伝、

一、竊印、道印、名印ト云事アリ、木ノ枝アシカヤ草ノ類、名印米五穀ノウチ青黄赤白黒諸ヘシラス、口伝、

一、竊者皮衣草蒲団持事、口伝、

一、旅之心得、二階之下ニ臥セス、出入口^江枕向ケス、床際或ハ爐之際ニ心付ヘク、忍ノ者ニ限ラス事、口伝、

一、セウチウ真綿ニ何ンヘンモヌリ、六月炎天ニホシ付ケ持ヘシ、一騎ノ者モ心カクヘキ事、口伝、

一、艾之葉并血留、血シバリ、膏藥、丸藥、散藥之妙藥、氣ツケ、トリ繩、千里沓、水吞ト之事、

一、刀脇差捨テ帰ル事アリ、拵可心附事、

一、衣類之事、裏表模様之事、付リ定紋無用之事、口伝、

一、カスカイ持事、カンジキ之事、口伝、一、密林、柚^{ユズ}或ハハクロ水、筆紙、口伝、一、イカリ繩之事、口伝、

一、続梯^{ハシゴ}、繩梯、口伝、一、冠物持事、二色モ三色モ可有事、口伝、

一、形ヲ以テ誠ト言事、但シホソリ者ノ業ナリ、口伝、

一、水中ニ隠ル、事、大小之拵ニ細工アリ、口伝、

一、駒カヘシ之事、付リ鋪ト揚^{アゲ}ル諸方^江入ル事ナリ、口伝、

一、旅宿繩張畳揚る事、口伝、

一、出抜ハ敵之大将之寢所、或ハ床之かけ物迄も見テかへるト云事、不審ニ思ふヘからず、元来六十余州の出抜一身の故ニ、其大将の出抜絵圖書付を以、座席は図迄可渡、依之信玄公ハ添人を以邪正わきまヘ玉ふ、添人、口伝、

一、出拔ハ卑賤業ト斗心得たるハ愚なり、小島亦兵衛禅宗之知識ナト仕
ひたる事あり、其外古代ハ能き武士をゑらミ仕ひし事多し、唐土ニて
も竊客ハ知謀の武士遣し事多し、武田家の多田治部左衛門、高田郷左
衛門賤きものニも是なく、

唐 竊客 奸者 細更 口伝
説客 竊者 しのひ

一、糯くちなしの水にて染ほし置候へハ、百年もこれあり、口伝、
一、味噌を持わかめをきざミ、味噌にてにつけ炎天にほし付、袋ニ入候
得は、百年もあり、いつなりとも是ゆにて入候へは、汁になる也、
一、餅米を強めしにしてほし^{二十久}、人參^{二久} いれ細末して二三日もくつし
とき、けしほど一丸用る時は、七日不飢、兵糧丸と云、口伝、
一、にせを置てとて、雨の夜など表にからきなとたて、番人の氣をう
ばへ裏分入と云ふ、細更、
一、窓二つあるとき、一方のまより投明松を打込、一方の窓のものの内
を見てかへるといへり、細更、
一、影をさすとは、竹など二衣をきせて戸口分入、番衆之心を見てかへ
るといへり、ねこいぬなど戸口分投いれると云り、細更、
一、義仲越中の城の四郎を攻る時、妙光山^妙あわかれこへ、是亦奸者を以
て利を得たり、口伝、
一、衣闇の夜の黒、月夜の薄浅黄、一、雪途跡に心を附、雨の時も心得
あり、一、竊者星なき方ニ行かず、口伝古実なり、
一、曇る夜は雲ひとつる方に不行、古実なり、
一、行先道に獣横に通る凶、古実なり、
一、噪方^{さわく}にいりよく、静なる方入にくしといへり、
一、竊者ニいてるもの祈念して出へしなり、口伝、

一、門出の食にあしあるハ吉事、古実なり、
一、門出のしるにかけ見へぬハ凶事、古実なり、
一、出る方あしくば、よき方ニ首途して出へしなり、古実、
一、門出の鳥のこへなカバ、きつ洞はきよし、古実、
一、城中陣所是非見るとはやくかへる印しなり、
一、様子かゑ姿をかゆる事、しのひの役なり、古伝、
一、竊の者昼夜の心得あり、昼は人にまきれて入へし、又人あると見へ
なから静かたる方に入かたかるへし、夜ハ敵のおとなきにたちよ
り、先表裏をもつて入へし、少しの音にもさわく様子、番のものゆだ
んの体様の所^江したかへよれハ、終にハしのびいるべし、口伝、
一、拍子木を持べし、杉の拍子木堅木の拍子木持べし、夜廻にまきれ入
時用るなり、陣中には右二^徳椀の拍子木有へし、敵方へ聞さる様ニ打時
ハ、杉の拍子木なるへし、是依之両様いるへし、但し拍子木打ものか
ならずあと先ニまきれて、五三人夜廻りのもの、飛道具、突棒、谷
投、手鎗など持もの通るへし、先後に此心得を以て入る事專一なり、
口伝、
一、功者の竊は雪隠にかくる、といへり、口伝、
一、退口には態と竊の入たると人の知る様にする事もあり、これ時によ
る事なり、口伝、
一、嶮岨の方或はがけ谷合大事の方より入る時は、けつく易し、心得あ
り、口得、
一、万事を聞あわすること、津々浦々船つきの場所、或ハ市場、惣して
繁昌の地しかるへし、口伝、
一、心付へきとも、執行坊主、町人、廻国の人、猿牽、さゝらすり、虚
無僧、占師、馬喰^{くら}、猿楽、口伝、
一、竊人、吉方、古実、子、午、酉、巳、亥、寅、其日ハ八日め分入、
丑、未、辰、戌、卯、申、其日ハ四日め分入、

右十二支方に当る也、

甲^{きのへきじの}乙日ハ戌の時に入、丙^{ひのへかのとの}庚日ハ寅子戌亥時二入ル、

戊^{つちのへかのとの}辛日ハ戌時に入、己^{つちのへみのとの}壬日ハ午亥時に入、

癸^{みづのへのとの}丁日ハ子の時に入、十乾^十を以て時を計なり、

昏^{こん}醉^{すひ}方^{チノマ、}
但シ、くらふ

極秘中秘

一、ひそう 五匁

一、朝倉山升 五匁

一、硫黄 五匁

一、胡升 五匁

一、焰硝 五匁

一、あさミの花 壹匁

かげほしにして、一、大明命^{たいみやめい、}
但シ、ぬけからを用ゐる、

一、しらむうや^{しもりのことなり、}

右八味細末にして、ひそう、山升、いわう、こしやう、四色ハふんし

にて、扱薬拵にもまた薬入るときもはなに紙をこミ、右薬竹袋^江入るなり、重々口伝、

右同断、霧の段と云、右同断、

一、大勢取籠り生捕かたきは、霧の段と云業御座候、是を以て竹の筒に入、かべにあなをあかし候、夫々ふき込候へは、内二居候者めくらミ卒死仕候、是を召捕さまし候薬あり、下のケ条にのす、

霧の段法書 左^二印

天南星^{しやうなんせい}。墨^{すみ}

丹凡^{ほん}

地黄^{じやう} 水^{みづ}壹匁

南蛮胡椒^{ばんばん} 三匁

小遷草^{せうせんそう} 十匁

楊梅皮^{ようばいかわ} 拾匁

胡椒^{こわ} 壹匁

椿の炭

あくニたれそれニ而七十度程洗ひ、日ほし粉にして焼台草かけほし^十匁

右細末にて竹の筒に入、先を紗^{しや}にてはり、敵の面^江かけ候、縄打の如く熊の皮^{かわ}にて造り、毛の内^江薬をもミ込、敵之面^江打かけ申候、またた、みたる扇子のうちに畳^ミこミ而も用ひ候、是を風^{ふう}よふ扇子と申候、

右薬拵の時、手前にて卵の肉をとり、からに酎を入一夜置、うへのか

らをくだき候へハ、竹のあまかわの如く残り候を取り、口にくくミ薬拵候、また敵にたいし用ゆる時も、是をふくミ申候、此薬に付江戸市ヶ谷

尾州様衆名譽のはたき是あり、是は御花畑御番衆森川三左衛門殿伝戸

田流兵法の向上極意あり、戸田^{（術カ）}戸田越後方二而扇にて仕合敵に卒死させ候ハふふよふ扇なり、重々口伝、

○昏睡

一、ひきかへる

極口伝

右さまし薬 香 秘中の秘なり、

腰附延命丸

一、人参^{じんじん} 一、松のあま皮^一 一斤

一、白米^{五合}

右細末好酒にて三日ひたし丸し、この割にてハ人数七人にて三日ほど、

△息合の制及持法

速制の法也、人参まる、はん割、とうぶん、また鼠の尾草割に、こうり砂糖粉にしてとうぶん、持様ハ麻の小袋二入、ひもを付、ゑりにか

△一念法 血止なり

石灰寒の水三十日にさらし、毎日水をかへかきたて、石灰之あく浮きたるを流し取、しこうして日にほす、翌年五月五日にう草の汁にてかきと、のへかため、よきほしこにす、丹少々交せてもよし、右の疵^江かけ疵を手にて押へ、諭へハ治す、また右の手ならハ左り、左の手ならバ右の方をはりにてすこしつく、

血しはりの針の様秘伝

右のかたならハ左り、左の方ならハ右のかたの耳のうら、血の道筋たつなり、その筋にはりを立、血を取、必血止る、疵口江右の薬を付るなり、

△水炬之事

- 一、焰硝七拾目 一、艾五匁 一、生腦二十目 一、硫黄二十目
一、松の引粉三匁 一、らしのかこん十匁
但し炬之法、数々外伝にいふ也、

△付木之法

- 一、唐蠟拾匁 一、生腦五匁 一、ちやん壹匁
右細末にして炬の口へつけ而硫黄少かへてもよし、

付竹の法

- 一、焰硝を湯に少し入あつ紙(厚)をひたし、日にほし、硫黄粉にしてそく(続飯)ひにませ、紙に一へんひき、又一枚を合せ用ゆる時、こまかに切て遣ふ、またこよりにしてもよし、

旅火繩之法

- 一、中奉書之紙に焰硝を酒にてときあわせ、硫黄を細末にして中江入(捲)よりて五十本百本も持、旅杯にて風雨はけしき時ともし用る事かふ、但し久しく用ゆるにハた、す、雨風にあひきへぬ、調法也、

不眠薬の事 秘中の秘

- 一、水銀を目薬具に一盆入、結口を漆にてぬり、胞のうへにおくなり、

眠る事なし、

- 一、血の落しやふ、当歳駒の糞をほしかため、常ニたしなミ、ぬるき湯にしめしぬくへハ、必能落る、信州松代兩角自休老ためし見たり、

△あか取至極の伝

- 一、公儀のすへ(照物新り)ものかりの名人山名嘉右衛門伝に、稲の苗田五寸ほどに成る時とり、根を去りすぎ、うちに能もみ和らけ、刺刀砥の粉二匁、生腦九分、水五合ほと、右之苗を一つにしてなへに入せんじ、大方苗にひたくとなる時取あけ、又能もミ、日陰にほし、絹糸にてあみ、大小好ミ次第なり、幾年へてもかわらす是にてぬくひ候得は、ちすき(血測)とれ、あふらもなく聊もさひす、名譽の法なり、深く秘すへし、

- 一、刀脇着物につよくあたり、或ハ落馬杯してのりてさやに納まりかたき時、直しかたあり、つかをはづし、切羽はばきをも鐙(れん)をもはづし、つかぶ身にして馬の尾にてこミあなをとふし、器の奇簾(れん)なるに水を入、其上に切先を水より三寸ほとにつるし一夜置ハ、かならずるくに成るといへり、武なれたる人の秘したる伝也、

- 一、人を切てのりたるハ、その当座に死人を以てた、き直す、必ろくになるもの也、

- 一、強沓こしらへ様ハ、鯨のひけを水と石灰をませいれおき、つち(糞)にてうち作る、また髪 of 毛麻とあわせ作る、又おもだかのくき雨に中らぬよふにほし作る、和らかにてよし、

- 一、あかいわしの頭らをほし、細かにして木綿のうちへなひませ、火繩に作る、是の火繩にては、天狗あれる深山に通候候ニしきひなし、
- 一、あしに血の落さる薬、まんでいかの油あしのうらより足くびまでぬるなり、

- 一、まむしに喰れたる時、鉄砲の薬を疵の上ニ置、火を付る、どくの氣をさるへし、

一、また極秘薬、焼明ばん水にてとき、きず口ふはれたる処江ぬれハ、一夜の内に疵口より水出て治る事妙なり、
一、燧火打ハ小刀のこたくにしてはをもつ、又小刀のおれよし、やすりなをよし、するに折なし、何も火打と知れぬよふ二すべし、

△眠睡薬

一、ねむる薬、敵のうちへ忍び入候時、この薬を紙より二いれ、火をつけ、壁に穴を明ケ内江さし入候得者、煙り二中りねむり申候、この干薬口にくわへ申候、或ハ此処ばんしやう杯にて、俄ニあしき息き又ハ眠り申候ハ、早速干薬をふくミ申へくなり、竊盗第一の秘事也、薬法糞の虫を陰干にしてこ二して、ぜんまひの綿にひねりませ、火を付用ゆるなり、扱皆はからひのこたくにして、わらひのうちに香免のわたのよふなるものこれあり、信州其外北国にこれあり、是は吉川流極秘なり、秘すべし云々、

一、危きなんにあふといへとも、小便にあわのおふくたつ時、命に別条なし、また舟にのり河を渡る時小便して見るへし、あわた時ハ行て害なし、あわなき時ハ驚変なり、

△兵粮薬

天薬種 南天薬 但薬の無時ハくきにても用ゆる也、右成程細末にしてそばをよく酒にてねり、日に干し、かくのこたく四五度も酒にてねり干し、二ツ五とうぶんにてうかふして、糊にて〇これほとに丸し、毎日七粒ツ、用ゆる、此薬にて五日十日廿日一年中もうへる事なし、顔色氣力もつねにかわる事なし、馬の息合にて天下無双の薬なり、義経四拾八ヶ条兵法口伝、虎の巻極意秘事也、

一、又法、南天の葉大筋をさりて摺鉢にてすりつけ、水をいれ一夜置、明日水を去り、その跡にてそばの粉をねり丸となす、湿にいたます、

是にて宮本武藏ゆへあつて山林に七十日居て、此くすりを用ひ難をのがれたる妙法なり、
一、また法、梨子のしぼりしるにてそはの粉をねり用ゆる、右はへの伝なり、

夜眼鏡

美人草と云草の葉七月取り、陰干にして水銀を右の葉にすりつけられハよくつく、金酒の付たることくなるなり、この葉もろくして研けやすきゆへに、めがねの箱のよふなるものに入て懷中する時に、息をふきあた、め和らけ、そのま、はやく箱に入れもつ、入用の時に取出し、息にてあた、め、鼻筋の上両眉の間にひたとつける、則べつたりとつくなり、闇の夜に家の内を見れハ、三間ほと見ゆる奇法也、此美人草けしの如し花さく、かくの如くにして、色浅黄にて椿の葉の如し、三日葉いである、京都には多く是あり、美人草二あらず、三月時分葉生す、極秘中の秘なり、

△水潜の術

水底にて息を遣ふ術、大のゆび人さし指にてはなをつまミ塞き、残りの指にて口を掩ひ、心しづかに息をすれハ、水をのまぬもの也、鼻よく息つうじされハ、誠にひすべし、軽き事にて重き事なり、

人を留る秘法

門内四方



ヨヨヨ 周吉留旧
天天天 隠隠如律令



南無光明天王そわか
南無五大力菩薩

右を庚申の日桔を筆に作り置てかくなり、竊盗ふしんせんさくをせ

バ、口々是を書て押へし、出る事不叶也、

盗賊悪党を防術之事

一、七月七日巳午の時、將軍木の葉をとり、九字を書、同十三日に細末して粘にて、敵きたらん方におとすへきなり、疫病をものがる、なり、三百六十へん、口伝、

首取て引導して捨る法

一、者をよき言葉南無蘊礙なるかな、こゝろをひるかへし、また生死をはなれよと引導して、是を死人の方江送り、我ハ生の方に立へし、邪心の首にてもあくじをなさずなり、

手を負すして得利大秘法のこと

一、先外種子の印をむすんでこの文をとのふへき事
止止不順説戒法妙離思諸長慢者門心不驚心と唱ふへし、
その日きずをこふむる事なくかつなり、

大極秘伝可秘云々、

一、大事之所を通る時は、



是の五を紙に書き我元どりにつけ、俺きるく
またうしゆくあせいそわかと七へん九字七へんとのふべし、矢玉けん（剣）の

難をのかる大秘伝、右同断、

枕の大事



一、枕にこの梵字を書、我かたへなし寝なり、大事あれば必目がさめへくなり、右同断、

一、人来て物いふ時、俄に口中にがく成る時、大事あり、たばかり打ん

とする気なり、可慎、
なかめとりてみる俄に一向これなくハ、大事にあふべし、心附あるへし、

隠形大秘法唯受一人の相伝なり

一、初産の子の胞衣を産婦しらせすよふにとりおき、九字百日の間一日二千へんツ、唱へ、かげほしにして、真蛇まむしの生きしるをとり、元どりにさす、敵我かたちをよくみる事あたわさるなり、しかりといへども、邪欲に用る時は、天罰以て尚あきらかにミゆるべし、疑とハ大事なり、重々口伝、

是此一巻者唯受一人之相伝也、

武田法性院信玄公蒙仰而馬場美濃守山縣三郎兵衛武藤喜兵衛二御内談之上、両三人被伝授可有之段、山本勘介被仰渡有之、予学之得其緒余、粵数年無断絶稽古之始終拔群之故を以、先師教之通行儀作法誠当流之教依叶而委令伝授畢、向後於三懇望之仁有^一之者、札^二其誠志^一誓文嚴密之上可有指南之条、仍而免許牒如件、

